

羊飼いの生活をよく表している映画にイタリア映画の「父パードレ・パドロネ」と言う作品があります1977年のカンヌ国際映画祭でグランプリを獲得した秀作です。学校に行かせられることなく、6歳から山で過酷な羊飼いの仕事をさせられるガビーノは文盲で育つのですが、音楽に出遭い、軍隊で学問と出会うことで、ついには言語学者になるという劇的な物語です。山では羊が狼に襲われないように、たった6歳で知恵を絞り奮闘する姿は、見ていてとてもつらい気持ちにさせられるものです。夜に仮眠するのは地面に掘った大きな穴の中なのです。この穴の中で過ごす限り狼に襲われることがないからです。父親はガビーノが6歳で小学校に行き始めると、その教室から彼を無理矢理連れ出し、羊飼いの仕事をさせるのです。自分も親から羊飼いは教育が必要ないという考えで幼少期から羊飼いの仕事を山で一人孤独にさせられた生育歴を持った人物出、息子に当たり前のように小学校から無理やり連れ出して、たった一人で羊飼いの仕事をさせるのです。イエスの時代の羊飼いの生活を彷彿とさせる作品です。私たちは、羊飼いと言うと、札幌の羊ヶ丘の牧場にいる羊を連想してしまいましたが、実際の羊飼いの仕事は、日本のように、日本狼が絶滅して久しい国は別ですが、社会では羊の養育は危険性は少ないのですが、イエスの時代には狼に襲われる危険性と隣り合わせで養育していたことを前提にしなければなりません。

私の実家は十勝で酪農家でした。牛をたくさん飼育していましたが、羊も何頭かいました。羊はその辺の雑草を食べさせればいいので、牛ほどに飼育に手間はかかりませんが、羊は目が悪いので、羊は移動する時は先に歩いて羊のお尻に頭をつけるようにして歩くのです。ですから、ある意味扱いやすいのですが、そういう羊の習性を理解していると、本日の聖書個所の理解が進みます。

本日の個所は9章からの続きです。9章では、生まれつき目が見えなかった人が、イエス1によって見えるように癒された記事が出てきます。けれども、その癒しの業が安息日に行われたことから、ファリサイ派の人たちと論争になりました。41節では、「イエスは言われた。『見えなかったのであれば、罪はなかったであろう。しかし、今『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る』とあります。本日の個所は、そのようにファリサイ派の人々がイエスの言葉を正しく理解できないことに対して、イエスがファリサイ派の人たちに話された箇所なのです。1節で『はっきり言っておく』と話し始めることで、大切な話をこれからしますよ、と注意を喚起して話し始めます。1〜2節『羊の囲いに入るのに、門をとおらないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。門から入る者が羊飼いである』と言われています。羊の門からではなく、ほかのところから入る者は盗人であり、強盗である、と言われたのは、9章からの関連でファリサイ派の人たちのことです。イエスの時代のパレスティナでは、羊たちを夜入れる囲いが石などを積み上げた中に入れていました。狼などの野獣から守るためであり、羊泥棒から守るためでもありました。7節で『わたしは羊の門である』、9節でも『わたしは門である』とあるように、3節にある『門番』と言うのはイエスのことです。盗人と呼ばれ、強盗と名指しされているのはファリサイ派の人たちのことです。ファリサイ派の人たちは、安息日に盲人の目を癒して見えるようにした業をする者がどうして神から遣わされた者だと言えるのか、そんなはずがないと言って、イエスの癒しの業を否定して、目が癒された人を会堂から追い出してしまったのです(34節)。イエスはファリサイ派の人たちがイエスという羊の門を通らないで、羊が夜を過ごす囲いの中に入って、羊たちを惑わす存在だと言っているのです。

これに対して、3〜5節をみると、イエスの声を聞き分ける羊は、囲いの門番をしているのが神から遣わされたイエスだということを知っているのです。羊たちは門番であるイエスが囲いの門を開くと、羊たちはその声を聞き分けて囲いに入っていくのです。イエスは、自分の羊たちをみな囲い

の中に引き入れると、今度はその先頭に立って羊たちを導くのです。羊たちは目が良く見えなくても迷うことなく、その導きの声を聞き分けて、イエスの従っていくのです。

そして、さらに注目したいことは、3節にあるように、羊飼いであるイエスは、羊たち一頭一頭の名前を呼んで連れ出すというのです。

北海道の酪農家の常識として、馬や牛を飼うときは、彼らの名前をつけません。牛には血統がわかるように、横文字の長い名前がついていますが、それは血統からどれだけの価値があるかを証明するためのもので、日常的に名前を付けて呼びません。おそらく、名前を付けて呼べば、その家畜は自分が呼ばれたことを理解して、来て来るとして来ますが、ペットのように名前を付けないのです。どうしてか。それは、名前を付けると、情が移ってしまつて、他に売りとばしたり、処分したりするときに、知れがでなくなるからです。テレビドラマの「北の国から」で、名優の大友柳太朗さんが演じた笠松のじいさんが、自分の開拓の苦労を主にした年老いた馬を馬肉として売りとばす際に、馬自身が売られていく悲しさを笠松のじいさんにどれだけ切実に伝えたかを回想するシーンがあります。そこでも、原野を切り拓いた同士ともいえる馬と別れを回想するシーンでも、原作者の倉本聰は馬に名前を付けない開拓民の掟を語らせているのです。20年近く原野を切り拓く労働に駆り立てていた馬が働かせることができなくなった高齢の馬になったので、馬肉の業者に売り飛ばすことを決断した笠松のじいさんが、馬を売った場面を回想するシーンで語るのです。

「馬鹿な話だ。馬を手放す気になつて初めて馬に名をつけていないことに気づいた。20年近くも飼っているのに。こころじゃ、めつたに馬には名をつけん。名をつけてはいかんと教えられた。名をつけると馬に情が移る。手放すときに心が痛む。昔は、冬ごとに馬を手放した。夏中働かせて、それでも食えんから、馬を売って、そして冬場をしのいだ。春に新しい馬を買うために、冬場は山で獣を取って売った。鹿やキツネやウサギやテンヤ」。そう言つて、馬に名をつけない開拓民の生活の実情を話すのですが、秀逸なのは、その後雨の中を黒板五郎の家に来た笠松のじいさ²んは酔っぱらつていて、言うのです。

「今朝売つたんだ。今頃はもう肉になつとるだろう。五郎、あの野郎、勘づいたらしい。今朝早く業者が連れに来るつていうんで、夕べご馳走を喰わせてやつたんだ。そしたら、あの野郎、察しだらしい。今朝トラックが来て、馬小屋から引き出したら、入り口で急に動かなくなつて、オラの肩に首をこう、幾度も幾度もこすりつけやがった。見るとな、涙を流してやがるのよ。こんな大粒の。でもな、18年間オラと一緒に、それこそ苦勞させて用がなくなつて、オラに言わせりゃ、女房みたいな相手よ。それから不意に、あの野郎、自分から歩いてポコポコ踏み板踏んでトラックの荷台の上が上がつていったもんよ。あいつだけがオラと苦勞をともした。あいつがオラに何言いたかつたか。信じていたオラに何言いたかつたか」。そういつて、笠松のじいさんは自転車で帰っていくのです。黒板五郎が車で送つて行くとするのですが、それを無視して雨の中をかえつて行くのです。翌日、川出溺死している笠松のじいさんが発見されるのです。

このように見てくると、イエスの時代に、羊に名をつけることが羊飼いにとって当たり前のことなのか、何となく信じがたくなるのですが、このイエスの話は、実際に羊飼いが羊に生をつけているのが問題の本質ではなく、神が一人ひとりの羊たる私たち信仰者の存在を名を呼ぶような関係性の中に招いておられることを言い表したものだといふことができるのです。けれどもファリサイ派の人たちはイエスの言葉の意味が理解できなかったのです。なぜなら、ファリサイ派の人たちにとって、神との関係性は人間の側での努力目標を誠実に実行している者だけに神が恵みを与えると考へていたために、罪人と言われる人々はその努力が最初から報われることなどありえないと考へていたから、神が信仰者の一人ひとりの名を呼んで恵みへと招いておられるとは少しも考へていなかった。イエスの羊の門の話が全く理解できなかったのです。